

縄文時代における願いのデザイン論

— 土偶の視点から —

Design Theory of Jomon-Period Expectations as Seen from Clay Figurines

東海林 克也
SYOJI Katsuya

【要旨】

本論文では、日本において形のある宗教ができる以前の信仰（願い）を縄文時代の特に代表的な遺物であり、生活の中に根付いていた土偶の役割という視点に着目し、先行研究の論旨を概観し、かつ分析を通して土偶の役割の視点から縄文時代に生きた人々の信仰（願い）を立証するものである。

土偶は当時の人々の祈りや精神世界の一端を象徴する遺物と考えられており、3 期に分けることができる。第 1 期（出現期・発生期）は子孫繁栄・安産の役割、第 2 期（中期）は子孫繁栄・死者の再生の役割、第 3 期（後期）は葬送関連（死者の再生）の役割があったと論じることが可能であり、子孫繁栄・安産や死者の再生という信仰（願い）の象徴が土偶として表現されていたことを証明した。

また土偶祭祀は縄文人の祈りを叶える行為だけではなく、デュルケムのいう「集合沸騰」の機能がある可能性を指摘し縄文社会（集落）を維持・結束する役割があったこと指し示すものであった。

本論文では土偶に着目し縄文時代の信仰（願い）を述べたが、縄文時代の遺物は土偶だけではない。例えば遺跡から発掘される立柱跡（樹木）、男性器をモチーフにした石棒などなんらかの祭祀的役割があった遺物も発見されている。土偶だけではなく、その他の遺物を総合的複合的文化要素から縄文時代の「願い」を明らかにする必要がある。

キーワード：縄文時代、社会、信仰（願い）、土偶

1. はじめに

(1) 問題意識

日本における「信仰」とは何かという問いに、多くは神道・仏教といったいわゆる「宗教」をあげることもでき、祖先崇拝や自然崇拝という信仰もあげられる。祖先崇拝は仏教を受容してから発生したという学説もあり、自然崇拝も神道より先に発生したのかについては見解が分かれている。では、神道や仏教という形のある「宗教」ができる以前の、日本における生活に根付いていた「信仰（願い）」はどのようなもので

あったのかという疑問が残る。

そこで本論文では仏教受容以前の、特に縄文時代に焦点をあて先行研究の論旨をふまえ、縄文時代の代表的な遺物である土偶の役割に着目し、縄文時代に生きた人々の「信仰（願い）」を立証するものである。

(2) 本論文に使用する宗教・信仰・願い・呪術の概念について

筆者は「宗教」「信仰」「願い」という語句を使用した⁽¹⁾が、本論文においての概念を提示しておく⁽¹⁾。まず「宗教」という語句については、阿満利磨が「教祖・経典・教団の3つから成り立っている宗教を創唱宗教とする」⁽²⁾と定義しており、本論文においても阿満利磨の論を援用し「教祖・経典・教団の3つによって成り立ち1つ（1人）の神（超越者）を信じること」とする。また「信仰」について筆者は以前に「自然や非日常的・不可思議な物事に対する畏怖・畏敬の念や日常生活において言語をもってしても説明しえないものに対する願い・祈り」⁽³⁾と定義した。本論文中では信仰と同意語として「願い」という表記をしている箇所があるが、意味としては同じである。

一方でこの「願い」がフレーザーの言うところの「呪術」との違いは何かという問題が残る。「呪術」とは一般的に「何らかの目的のために、超自然的存在（神、精霊その他）あるいは呪力の助けを借りて、種々の現象をおこさせようとする行為およびそれに関連する信仰の体系」⁽⁴⁾（傍点部筆者）と理解されている。また、フレーザーは「呪術」を「おそらく呪術は人類の最原始期において宗教より前に発生し、原始人は祈禱と供儀との巧みな術策をもって内気で移り気で短気な神々を宥め慰めようと試みる前に、自分の欲望を達するための呪文や魔法などの威力をもって、直接自然界に肉薄したものと考えられる」⁽⁵⁾（傍点部筆者）と定義している。

フレーザーの「呪術」概念や一般的な理解とされる「呪術」の共通項としては「何らかの目的のために」「自分の欲望を達するため」に「呪術」を行ったということであると理解できる。つまり「呪術」とは「目的・欲望」という人間の「願い」をかなえるための方法であった。この点から鑑みると、筆者の規定する「信仰」には「願い・祈り」が組み込まれており「呪術」と同意語とみなすことができる。本来であれば、さらに「信仰（願い）」と「呪術」の理論をより深く精査しなければならないが、ページの都合上割愛し今後の研究課題とさせて頂きたい。以上のことから本論文上では「呪術」という語を用いるのではなく、信仰（願い）という表現方法を用いる。

2. 縄文時代の時代区分

縄文時代についての時代区分を定義することは難しい。例えば泉拓良は以下のように述べている。「縄文時代は一見、文化史区分のようであるが、縄文時代の設定のためには、縄文文化を定義し、他の文化との空間的（地理的）な限定をおこなう必要がある。（中略）縄文文化を日本列島内に広がる均一で単系の文化と考える研究者は少なく、縄文文化成立についても一元論、二元論、多元論があつて（後略）」⁽⁶⁾ というように縄文時代や縄文文化の定義は研究者であってもその困難さを認めている。このような研究現状のなか、現時点では「厳密な意味での文化史区分で縄文時代を区分するのでは

なく、日本列島の大まかな年代区分として、水田稲作以前の土器をもつ採集狩猟漁撈を中心とした時代」⁽⁷⁾と定義付けている。

本論文においては縄文時代の定義を研究するものではないため便宜上、泉拓良の定義を援用し研究を進める。

3. 土偶と信仰

土偶⁽⁸⁾とは粘土を捏ねて人の形に似せて作られた素焼の小像である。それは「縄文時代を代表する遺物の1つであり、当時の人々の『祈り』や『精神世界』の一端を象徴する遺物」⁽⁹⁾と考えられている。また土偶には多くの種類が存在し製作時期によって縄文前期・中期・後期の3段階に分けられる⁽¹⁰⁾。ここで前期・中期・後期の3段階に分けて論述しているが、縄文時代の歴史区分には創世紀・早期・前期・中期・後期の五段階に分けている研究者も多い。さらに土偶や土器編年による文化区分などによって縄文時代の区分が変化する場合もあり、縄文時代の詳細な区分については定説に至っていないのが現状である。先行研究や引用するにあたっては研究者によって前期・中期・後期だけではなく、後期後葉・終末期という区分や発生期・出現期という語句の揺れが見られるが、本論文では原文のまま表記する。

土偶の用途などについては現在に至るまでに多くの考察がある。本論文では全ての研究史を網羅するのは不可能であるが、その中から土偶の役割・機能についての論考を確認し、土偶と信仰（願い）との関係について縄文時代を通して見ていく。

(1) 土偶の先行研究

子孫繁栄や安産などが土偶の目的として考察しているのが原田昌幸⁽¹¹⁾である。原田は発生期・出現期の土偶について「堅穴住居を中心とした、家族集団の個々が、家族祭祀の目的で個々に作り、用いた呪術具」であるとし「家族単位の子孫繁栄や安産などが仮定される」のが妥当であると論じる。加えて縄文中期に出現する立像土偶（自立する土偶）の製作背景には「堅穴住居単位の家族祭祀から集落祭祀、複数の集落群の共同祭祀のための『呪具』になった可能性がある」としている。

同じく縄文中期から出現する母乳を与える姿の土偶、片手を胸に当てた土偶、片手で壺を抱く土偶などの「ポーズ土偶」は「妊娠・出産・育児などの子孫繁栄に関する母の姿そのものを彷彿させる」としている。すなわち土偶の機能や信仰は「中期段階までの家族祭祀に重層する形で発達した集落祭祀の在り方を、後期段階にはその集団祭祀の部分が、より『祈り』を直接的に土偶に表現する形に変質していったと考えたい」としている。

次に縄文中期出土の仮面土偶について論じているのが守矢昌文⁽¹²⁾である。守矢は縄文時代中期の中ツ原遺跡（長野県）から出土した仮面土偶について「被葬者の再生を願う儀式としての土偶」と論じている。その根拠としては、中ツ原遺跡が縄文中期の拠点的な環状集落であること、仮面土偶の出土した土坑が集落中央広場と見られる区域であること、この区域が縄文中期から後期にかけて墓が構築される伝統的な場所であること、の3点を挙げている。さらに仮面土偶は完全体で出土したものでは

なく、人為的に右脚部が取り外された「壊された土偶」であることが判明した。その結果、「仮面土偶は墓とされる遺構から出土し副葬品とされる土偶である」としている。土偶が副葬される過程については「①副葬に際し土偶の完形を壊す。(破壊された土偶) ②土偶胎内への破片詰め込み(土偶胎内への封じ込め) ③壊された土偶の再設置(土偶の再生)」の3段階を経るとしている。すなわち守矢は副葬された土偶の機能について「非葬者を送る埋葬儀式の一過程として、土偶の破壊、胎内への封じ込め、土偶再生の一連の祭式が組み込まれたケースと考えられ、非葬者の再生を願う儀式として土偶が取り扱われた」と主張している。なお被葬者については『仮面土偶』は祭祀を司る者を表現していると思われ、それが『壊され』『再生』されるまでの一連の行為と埋葬には、被葬者の性格にも深い結びつきを求めることができよう」と被葬者についても言及をしている。

さらに小野正文⁽¹³⁾は縄文中期・後期の土偶について比較検討をおこなっている。小野は中期土偶については「お産をしているもの、中空で鳴る土偶というもの、おそらく妊娠しておなかに赤ちゃんがいる状態を表しているのではないかと思われる」と考察している。お産をする土偶は中部地方では縄文中期にしか出てこないことから土偶の機能については「中期までの土偶と違い、後期ぐらいから少しずつ変容してくるのではないか」とまとめている。

また設楽博己⁽¹⁴⁾は縄文時代晩期から弥生時代に移行する時期に再葬墓から出土する土偶形容器に注目し土偶の再葬について研究を行っている。設楽はまず土偶の出土状況と副葬品としての土偶の関係について「北海道などの縄文後期後葉以降と中部日本の晩期終末以降の例を除くと、ヒトの埋葬に伴う土偶は皆無に等しい。このことから縄文晩期終末以前に土杭墓からの出土はきわめて稀なことからすれば、土偶は本来、副葬品としてヒトの埋葬に伴うものではないことは確かであろう」と記すように土偶と埋葬の因果関係は本来なかったとしている。副葬される土偶の開始時期について「北海道は後期後葉から始まり後期終末にピークをもつ。中部日本は再葬墓とかかわりを持ち、晩期終末から弥生中期にピークをもつ」としその背景は「北海道を中心に他界観が明確化していくなかで、再生観を背景に始まったと思われる」としている。さらに再葬される被葬者については「シャーマンのような、集団的儀礼の限られた執行者個人」が考えられるとしている。つまり設楽は再生のシンボルとしての土偶は「北海道方面から土偶副葬という習俗の影響を受け、再葬を導いた祖先に対する意識の高揚や再生観と結びついて再葬墓に副葬されるようになったのではないか」と研究をまとめている。

同様な見解は品川欣也⁽¹⁵⁾も述べている。品川は縄文晩期後葉以後、土偶は土偶形容器・口縁部顔面付壺形土偶の出土状況に焦点を当て論じた結果、土偶形容器・口縁部顔面付壺形土偶は「蔵骨器や再葬墓にともなう事例が多く、墓地遺跡と関係が深い」とし「晩期土偶から派生する土偶形容器・口縁部顔面付壺は一般的に葬送の場面で使われる」という考察を行っている。

以上のように先行研究を概観した結果、表1のようにまとめることができる。

表 1 縄文時代における日本の土偶

出現時期	役 割
発生期・出現期	子孫繁栄・安産
中 期	子孫繁栄 死者の再生
晩 期	葬送関連

筆者作成、2018

(2) 検討と考察

この先行研究を検討する前に、縄文時代の生活環境について確認する必要がある。なぜかといえば、一般的に、縄文時代の生活環境とは、狩猟生活が主であり、定住生活に比べ生活しにくく、当時の平均寿命の短いというように縄文時代＝生活しにくい厳しい環境という固定観念にとらわれてしまう可能性があるためである。もちろん、本論文で縄文時代の生活環境をすべて説き明かすことは不可能であるが、一つの目安として平均寿命から縄文時代の生活環境を確認する。

縄文時代の生活環境や平均寿命について、人類学・生物学の視点から分析している研究者が居る。人類学者の小林和正は「平均死亡年齢は、縄文前期～晩期合計について男女とも 31 歳」⁽¹⁶⁾ としている。同様に生物学者の本川達雄は「縄文人の寿命は 31 歳。発掘された骨から求めた値です。この時代は幼児の死亡率がものすごく高いので、それは除いて、生殖年齢に達したものの、つまり 15 歳より長生きした人の平均をとる。それでも寿命は 31 歳なのです」⁽¹⁷⁾ と論じている。このような生存状況のなかで、女性にとって出産はまさに命がけの行為であり、赤子だけではなく母体にも大きな負担がかかり場合によっては出産時に母親が亡くなることもあったと推測することは可能である。

つまり、原田・小野が論じる「子孫繁栄・安産」「妊娠・出産・育児などの子孫繁栄に関する母の姿そのものを彷彿させる」という土偶の機能は縄文時代の生活環境を鑑みると否定できない考察である。したがって土偶の形態が基本的に女性を表しているという学説は環境的に見ても妥当であり、原田・小野の論を証拠立てるものである。

ここで、改めて発生期・出現期・中期から出土した土偶の姿を見てみると、腹部が大きく膨らみ妊娠を象徴しているもの、乳房を特徴的に表わしているモノや女性器を表現している土偶など、姿形の特徴は女性や妊婦を現しているものが大多数であると見なすことができる。それほど女性を強調する形がなぜつくられたのかという疑問が残る。その解答の一つとしては、「女性」という性に対する特別視があったと考えられる。単に人の形という土偶を作るというのであれば、女性ではなく、男性像でも良いはずであり、あるいは、男性・女性両方の土偶を作ることもありえたはずである。だが縄文人たちは男性的姿の土偶を作ることはしなかった。すなわち、女性の生物的役割である妊娠・出産という男性に担うことのできない役割的象徴を土偶へと反映させたということである。つまり、土偶は「女性」でなければならない特別な理由があったと言わざるを得ないのである。

以上から、縄文土偶の発生期・出現期・中期（その一部）の役割が子孫繁栄・安産であったといえることができる。それはとりもなおさず、土偶に女性的役割を持たせていたといえることができる。それは妊娠・出産という女性特有の神秘的象徴を土偶に反映させていたという証左になる。すなわち、土偶の機能の一つである「子孫繁栄」は子供が無事に生まれることや出産の無事を願う象徴であった。

さらに付け加えるとすれば、中期に出現する中空土偶の中に入っているコロコロとなる石・種子や壺を抱える土偶は「豊饒」の機能も有していたと考えることもできる。縄文時代の食料事情は自然に依存しており、自然環境の変化によって食糧がなくなることは生命の危機であるがゆえに、食料の確保は重要な悩みの一つであった。土偶のなかの石・種子は食料を生み出す（出産・豊饒・植物の発芽）という見立てをしていたと考えることもできる。

一方で、土偶が抱える壺は出産・生産にも関係していたと見ることもできる。壺は調理をする道具であり調理は命を育む重要な役割をはたしていた。その調理する道具を抱き抱えるというポーズは子供をあやす、もしくは授乳を行う様子と捉えることもでき、また壺に出産（子育て）・生産（発芽、豊穰）を重ね合わせて祈願していたとも把握できる。女性の出産という神秘的行為だけではなく豊饒、つまり植物の芽吹きをも同様に感じとっていたのが土偶であったと考えられる。

また守矢・設楽の死と再生と土偶についての考察は非常に興味深いものである。両氏とも縄文中期以降、晩期から弥生時代にかけて土偶が墓ないし墓域から出土していることに注目している。縄文中期以降、晩期から弥生時代にかけての出土例については墓・墓域から土偶が出土している現状を考えればこの考察は否定できない。

ここでは、なぜ土偶が「墓・墓域」から出土するのかという点が問題である。土偶が墓域周辺から出土している状況から鑑みても、墓域から出土した土偶の機能としては再生の機能を持ち合わせていたということが考えられる。単純には土偶（もしくは壊れた土偶）が「死」と関連するということである。原始社会の死生観は「古代的心性においてある状態を変化させるためには、まず現状を滅ぼし、ついで新しい状態をもたらさなければならないと信じられている」⁽¹⁸⁾ という「死と再生」の死生観があり「死」は物事の終わりと考えられていたのではなく、生命の誕生という循環する命のストーリーの一環と見ることもできる。土偶の儀礼について磯前順一は「土偶の作成／安置／破壊・分割／廃棄・埋納／新たな土偶の作成の諸過程があった」⁽¹⁹⁾ という推測し、土偶の役割は死からの再生を表わしていることを指摘している。ここからは、縄文時代を生きた人々にとって「死」は物事の終焉を指すのではないという考察が可能である。現代的感覚でいえば生と死は二項対立で考えざるを得ないが、縄文時代において生と死は断絶しているのではなく行き来できるという世界観があった。

このような古代人の死生観と再生との関連でいえば「ハヌウェレ型神話」が「墓・墓域」から出土する土偶と関連性が高いと考えられる。

4. ハヌウェレ型神話と豊饒の機能について

「ハヌウェレ型神話」は世界各地に見られる食物起源神話の型式の一つで、殺され

た神の死体から作物が生まれたとする初期栽培民文化の中心的神話である⁽²⁰⁾。

吉田敦彦はまず「土偶は女性を表現しており地母神の性格を持つ女神である」⁽²¹⁾と規定する。さらに殺された神の死体から作物が生まれるというハイヌウェレ型神話と『古事記』のオホゲツヒメ神話⁽²²⁾や『日本書紀』のウケモチ神話⁽²³⁾との共通項を見いだしている。そこでは神の死体を、バラバラにされた土偶と重ね合わせるができるという見解を述べている。すなわち、吉田は「土偶をつくっては壊すことで、当時の人々は、その女神が殺されて体が破片にされることで、自分たちの生活に必要な作物が、豊に生えて育ち実るのだと信じ、その信仰に基づいた祭りを一所懸命にくり返していたのだと考えられる」⁽²⁴⁾と考察している。

一方で藤沼邦彦が指摘しているように、土偶と農耕（農耕神話）とが関係しているのであれば土偶の製作は「あくまでも農業社会を背景としたものであり、これまた、食料の大部分を自然界の恵みに頼っていた縄文時代の土偶に結びつけるわけにはいかない。もし、土偶が農耕に関係のあるものなら、弥生時代に入っても土偶を作りつづけていただろう」⁽²⁵⁾と土偶と農耕との直線的な関係について反論している。さらに藤沼は土偶の役割を「自然界の動植物を豊かにし、あわせて子孫繁栄などに大いに力を発揮する精霊の依代として土偶が作られた」⁽²⁶⁾とし「水田稲作を中心とした農耕生活が中心になっていくと、土偶が霊力を発揮する場は少なくなり、やがて作られなくなる」⁽²⁷⁾と論じている。

しかし、藤沼の指摘には反論が可能である。ここにおいて問題となるのは「土偶と農耕」という直線的な関係である。

藤沼の指摘は農耕と土偶の関係についてであり、先に述べた土偶と「ハイヌウェレ型神話」との関係も農耕と土偶の関係である。だが、土偶と「ハイヌウェレ型神話」との関係を「農耕」だけに限定する必要がないのではないのか、とうことである。土偶の機能については先に子孫繁栄・安産・死者の再生とまとめたように、あくまで土偶の機能は子孫繁栄・安産・死者の再生が中心である。そこで土偶と「ハイヌウェレ型神話」との関係を「農耕」に限定するのではなく「豊饒的機能」と広く求めるべきである。縄文時代にはクリが常食されていたということが既に指摘されており、農耕だけではなく、クリなどの作物を中心とした「豊饒的機能」という解釈は十分に可能であると言える。

ここまで「土偶と死」の関係の中で一見すると無関係とも思える「豊穰的機能」について述べてきたが、この「ハイヌウェレ型神話」は「土偶と死」において重要な意味をもつものである。土偶に「ハイヌウェレ型神話」を「農耕」に限定せずに「豊饒的機能」というように幅を持たせることは「死」に十分に関係するのである。そこには土偶の「豊饒的機能」に「生命を誕生させる」機能があったと考えることができる。この「生命を誕生させる力」が備わっていたことは荒唐無稽ではない。先にまとめた表1から分かるように、土偶に子孫繁栄や安産の機能がかったことは周知の通りである。この「生命を誕生させる力」が死者を再生させる力として置き換わり⁽²⁸⁾があったと考えることは十分に可能である。つまり土偶の「死者を再生させる力」を求めて、縄文中期の土偶は「墓・墓域」周辺から出土すると考えることができる。

そこで縄文時代における日本の土偶の機能について3つの段階に分けることができ

る。第1期（出現期・発生期）は「子孫繁栄や安産」の機能が備わっており、第2期（中期）は「子孫繁栄」「死者の再生」とすることができ、第3期（後期）は「葬送関連（死者の再生）」という機能があったという変遷を辿ることができる。ここでは土偶と信仰のかかわりを論じてきたが、改めてまとめると、「子孫繁栄や安産」「死者の再生」という縄文人の願いが土偶という象徴としての「モノ」を媒介として「信仰（願い）」があったと立証できる。

5. 土偶と制作者について

ここまで、縄文人の願いを論じてきたが、本章において土偶と縄文社会のかかわりについても論じる。

本論文での縄文時代の定義として先に「採集狩猟漁撈を中心とした時代」と述べたように、縄文時代の食料取得状況は採集狩猟漁撈が中心であった。日々の食料を調達する場合には分業制を取っていたであろうとされている。狩猟や漁撈といった肉体的に負担が大きいものや常に命の危険がともなう労働は男性が行い、比較的安全にできる木の実などの採集は女性の仕事と考えられる。なぜなら、もし危険な労働によって女性が亡くなることがあれば、生まれてくるであろう子供をも失うことになる。子を失うことは縄文社会の成員が減少することにもつながり、やがて縄文社会は崩壊する道筋をたどることになる。現代的な視点では批判的にみられるかもしれないが、縄文社会においては男性・女性という性によってそれぞれの役割が求められていた。

本論文においては「土偶」を研究したが、土偶が女性を表現していたというのは命をかけて子供を産むという女性の神秘的役割があったからである。さらに今回の研究では触れることができなかったが、男性器を模した石棒には死者の再生があるとされており、遺物から見ても性によって役割が違っているのは縄文社会においては性別によってそれぞれの「社会的役割」⁽²⁹⁾があったとみられる。

縄文社会において、土偶が女性を表現し女性の役割では安産が願われていたということは、土偶製作には女性がかかわったと考える余地は十分にある。例えば出産の痛みについて男性からすれば想像を絶する痛みということだけしか推測できない。この出産の痛みや大変さは現代人であろうが縄文人であろうが男性である限りはわかることができないのである。理解できるのは出産を経験した女性だけである。とすれば、土偶を作ったのは女性（または出産経験のある女性）が安産を祈願する目的のために妊娠した女性のために作製したと推し測ることもできるのではなかろうか。現在の研究では誰が土偶を作ったのかという結論はでておらず、本論文でも結論を出すことはできないが、今後も土偶は誰が作ったのかという問題は縄文社会の研究をするうえで必要である。

6. 土偶祭祀と集落の維持・結束について

縄文時代に生きる人々の願いが土偶を介して表現されていたことは述べた通りだが、土偶の社会的役割とはいかなるものであったのだろうか。

最初に考えられることは土偶祭祀⁽³⁰⁾が行われていた可能性である。一般的な祭祀の理解とは「神をまつこと。祭祀の目的には①祈願②報告③感謝④慰霊⑤予祝⑥神意判断⑦清め、などがありこれらの複合もある」⁽³¹⁾と理解されている。つまり祭祀の一般的理解は「神をまつこと」とされており、縄文時代に神観念があったかどうかについては疑問が残る。しかしその目的には「祈願」が含まれているため、本論文においても土偶の用いた祈願を土偶祭祀とする。このような土偶祭祀は縄文社会にどのような影響を与えていたのだろうか。

縄文時代の集落について山田康弘は中国地方を例にあげ「血縁関係によって結ばれた小家族集団が居住しており（中略）小家族集団は二～三世代の親子孫などからなる拡大家族と言うべきものにも比定できよう」⁽³²⁾と考察している。この山田の想定する小家族集団が一つの集落を形成していたと考える場合、土偶祭祀は集落内で暮らしている個人個人がバラバラに祭祀を行っていたと見るよりは、集落内での共同祭祀であったとする方が妥当であろう。

すなわちデュルケムの解釈する「集合沸騰」⁽³³⁾の機能が土偶祭祀にはあったといえることができる。この土偶祭祀の役割は、無論、縄文時代に生きる人々の願いを叶えるための祭祀であったと同時に集落内（縄文社会）を維持・結束する役割があったことは明らかである。

7. 縄文社会と土偶についてのまとめ

本論文では縄文時代の代表的遺物である土偶について役割の視点から分析した。その結果、土偶の役割としては子孫繁栄と安産や豊穡の願いを祈願する機能が備わっていたと立証することができた。また、土偶の社会的関係について、土偶の製作者を分析枠組みとして論じたが、土偶を作った人は集落内の女性であることを示唆するにとどまった。さらに土偶祭祀については、集落内での共同祭祀であることを述べ縄文社会（集落）を維持・結束する機能を持ち合わせていたことを述べた。

今後、縄文時代の「願い」の知見を深めるためには土偶以外の遺物を調べる必要がある。縄文時代の遺物は土偶だけではない。今回は触れることができなかったが、例えば遺跡から発掘される立柱跡（樹木）、男性器をモチーフにした石棒など、なんらかの祭祀的役割があった遺物も発見されている。土偶だけではなくその他の遺物を総合的複合的文化要素から縄文時代の「願い」を明らかにする必要がある。

今回、仏教を受容する前の土着的な日本の信仰、特に縄文時代の信仰はどのような「モノ」によって表現されたのかを論じた。土偶は縄文時代に生きる人々の生活に根ざした信仰（願い）の象徴として表現するところの「モノ」になっていたとすることができる。植田が「文字や記号をもたない縄文時代に宗教が存在しないことは明白で（後略）」⁽³⁴⁾と表現するように縄文時代には「宗教」は存在しない。しかし縄文人の精神世界には子孫繁栄・安産・豊饒・死者の復活といった信仰（願い）があったことは、土偶の役割という視点から見て明らかである。

■註

- (1) 「宗教」「信仰」の定義過程について筆者は以前に発表した論文に詳しく論じているため、ここでは発表した論文に基づき概念を提示している。東海林克也 2016「日本における慣習的信仰の基礎的研究」『21世紀社会デザイン研究』15号。
- (2) 阿満利磨 1996『日本人はなぜ無宗教なのか』筑摩書房。
- (3) 東海林克也 2016「日本における慣習的信仰の基礎的研究」『21世紀社会デザイン研究』15号。
- (4) 小口偉一・堀一郎監修 1973『宗教学辞典』東京大学出版会、執筆者は吉田慎吾。
- (5) フレーザー著、永橋卓介訳 1951『金枝篇』岩波書店。
- (6) 泉拓良 2013「縄文文化の展開と地域性」今村啓爾・泉拓良編『講座日本の考古学3 縄文時代(上)』青木書店。
- (7) 泉拓良 2013「縄文文化の展開と地域性」今村啓爾・泉拓良編『講座日本の考古学3 縄文時代(上)』青木書店。
- (8) 縄文時代の土製の人形をいう。形式の上から板状土偶・ハート型土偶などの名も用いられる。縄文時代全期を通じて女性をあらわし、出産を助け、活力をもたらすなどの神聖で呪的な要素の含まれるものであることは明らかである。斉藤忠 2003『日本考古学用語小辞典』学生社。
- (9) 小野美代子 2007「縄文土偶と祭祀」梶山林継・山岸良二編『原始・古代日本の祭祀』同成社。
- (10) 小野正文の論考には各期の土偶や形態について詳細な解説が記述されている。小野正文 2008「縄文時代の祭祀」安斎正人・小野正文・黒崎浩・梶山林継・平川南『祭りの考古学』学生社。
- (11) 原田昌 2009「土偶祭祀の構造」『季刊考古学』第107号、雄山閣。
- (12) 守矢昌文 2010「中つ原遺跡における仮面土偶出土の意義」『月間考古学ジャーナル』12月号、通算608号、ニューサイエンス社。
- (13) 小野正文 2008「縄文時代の祭祀」安斎正人・小野正文・黒崎浩・梶山林継・平川南『祭りの考古学』学生社。
- (14) 設楽博己 1996「副葬される土偶」『国立歴史民族博物館研究報告』第68集。
- (15) 品川欣也 2004「土偶と石棒からみた縄文祭祀のゆくえ」『季刊考古学』第86号、雄山閣。
- (16) 小林和正 1977「縄文時代人の寿命をさぐる」『数理科学』8月号、株式会社サイエンス社。
- (17) 本川達雄 2011『生物学的文明論』新潮社。
- (18) 小口偉一・堀一郎編 1973『宗教学辞典』東京大学出版会、執筆者は中村恭子。
- (19) 磯前順一 1994『土偶と仮面—縄文社会の宗教構造』校倉書房。
- (20) 大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松村一男編 2005『世界神話辞典』角川書店。
- (21) 吉田敦彦 2018『女神信仰と日本神話』青土社。
- (22) スサノヲによって殺されたオホゲツヒメの死体の頭からカイコ、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が発生したという農業起源神話。
- (23) ツクヨミに殺されたウケモチノカミが死体の頭から牛と馬を、額からは粟を、眉からはカイコを、眼の中からはヒエが、腹には稲が、陰部には麦、大豆、小豆が発生したという神話。
- (24) 吉田敦彦・古川のり子 1996『日本の神話伝説』青土社。
- (25) 藤沼邦彦 1997『歴史発掘③縄文の土偶』講談社。
- (26) 藤沼邦彦 1997『歴史発掘③縄文の土偶』講談社。
- (27) 藤沼邦彦 1997『歴史発掘③縄文の土偶』講談社。
- (28) ここで置き換わりという表現を用いているが、生命誕生の力と死者を再生する力はイコ

ルでみても構わないと思われる。

- (29) 同様の考えとして山田康弘は縄文人の世界観が大きく男性・女性に区別されていたと述べている。山田康弘 2015『つくられた縄文時代—日本文化の原像を探る』新潮社。
- (30) 縄文時代の遺物などと祭祀の関係については神道考古学の分野が研究を進めている。
- (31) 『国史大辞典』1993、吉川弘文館。
- (32) 山田康弘 2015『つくられた縄文時代—日本文化の原像を探る』新潮社。
- (33) 宗教的祭儀などの場で、人々が密集しあうことに伴って生じる激しい集団的興奮状態。デュルケムによると集団的熱狂、高揚の中で人々は日常的現実、自己を離れて、集団と一体化し、集団（社会）やその理想、すなわち聖なるものの実存観や道徳的権威を体験・再確認するとされる。デュルケムはオーストラリア・アボリジニのトーテム祭儀の分析を通して、こうした集団沸騰の社会統合、社会創造の機能を強調した。森岡清美他編 1993『新社会学事典』有斐閣。
- (34) 植田文雄 2005「立柱祭祀の遠近」『歴史智の構想』鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会。

■参考文献

- 阿満利磨 1996『日本人はなぜ無宗教なのか』筑摩書房
- 安斎正人・小野正文・黒崎浩・椋山林継・平川南 2008『祭りの考古学』学生社
- 泉拓良 2013「縄文文化の展開と地域性」今村啓爾・泉拓良編『講座日本の考古学3 縄文時代（上）』青木書店
- 磯前順一 1994『土偶と仮面—縄文社会の宗教構造』校倉書房
- 植田文雄 2005「立柱祭祀の遠近」『歴史智の構想』鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会
- 大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松村一男編 2005『世界神話辞典』角川書店
- 小口偉一・堀一郎編 1973『宗教学辞典』東京大学出版会
- 小野正文 2008「縄文時代の祭祀」安斎正人・小野正文・黒崎浩・椋山林継・平川南『祭りの考古学』学生社
- 小野美代子 2007「縄文土偶と祭祀」椋山林継・山岸良二編『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 小林和正 1977「縄文時代人の寿命をさぐる」『数理科学』8月号、株式会社サイエンス社
- 『国史大辞典』1993、吉川弘文館
- 齊藤忠 2003『日本考古学用語小辞典』学生社
- 設楽博己 1996「副葬される土偶」『国立歴史民族博物館研究報告』第68集
- 品川欣也 2004「土偶と石棒からみた縄文祭祀のゆくえ」『季刊考古学』第86号、雄山閣
- 原田昌文 2009「土偶祭祀の構造」『季刊考古学』第107号、雄山閣
- 藤村邦彦 1997『歴史発掘3 縄文の土偶』講談社
- 本川達雄 2011『生物学的文明論』新潮社
- 森岡清美他編 1993『新社会学事典』有斐閣
- 守矢昌文 2010「中ツ原遺跡における仮面土偶出土の意義」『月間考古学ジャーナル』12月号、通算608号、ニューサイエンス社
- 山田康弘 2015『つくられた縄文時代—日本文化の原像を探る』新潮社
- 吉田敦彦 1986『縄文土偶の神話学』名著刊行会
- 吉田敦彦・古川のり子 1996『日本の神話伝説』青土社
- 吉田敦彦 2018『女神信仰と日本神話』青土社

